

人種問題をテーマにしたナラティブ・セラピーにおける力関係とコミュニケーションスタイルⁱ

饒平名 尚 子

1. はじめに

アメリカ社会における人種問題の根深さは、Black lives matterという運動の高まりに今もなお見ることが出来る。本稿では人種差別をテーマに、人種の異なるセラピストとクライアントの間で行われアメリカで録画されたナラティブ・セラピーのセッションをとりあげる。クライアントはアフリカ系アメリカ人の少年とその母親である。人種、社会的立場、それらに付随する社会的パワーの違いがどのように発話の中に現われたかを社会言語学的に検証する。そして、白人のセラピストと、犯罪者として裁判所からアンダー・マネージメント・セラピー（怒り管理のセラピー）を受けるように言われたアフリカ系アメリカ人の少年とその母親との間のセラピーにおいて、クライアントが置かれている少なくとも3つの不均衡な力の存在を指摘する。それらは、(1) コミュニティに存在するアフリカ系アメリカ人に対する否定的な取り扱い、(2) セラピーという場におけるセラピストと相談者という社会的役割に付随する力の差、(3) 社会的属性の違い（年齢、人種、ジェンダー等）に関連した力の差である。

さらに、セラピーの場で語られた発話の分析から、(1) *race*という単語の使用/欠如、(2) 人種に関してためらいがちで間接的な物言い、(3) 人種的に異なる視点をとらえるための*you*の使用、(4) 非標準的な英語変種の使用に焦点をあてて、これらを通してセラピストとクライアントの関係性やクライアントの社会的マイノリティとしてのポジションがどう浮かび上がっていくかを具体的に検討する。

i 本論文は、2017年に国際語用論学会第19回大会（於ベルファースト）でポスター発表したものに大幅に加筆修正したものである。

2. 先行研究

2.1. ナラティブ・セラピーについて

ナラティブ・セラピーはいくつかの流派があるが、本稿でとりあげるのは White & Epston (1990) によって始まり、社会構成主義に基盤を置いて発展してきたセラピーである。根底にあるのは、"relational/contextual/anti-individualist therapeutic understanding of persons, problems, and relationships" (Madigan 2019, p. 4) であるという。つまり相談者のアイデンティティや問題は、固定的に個人の中にあるのではなく、社会やコミュニティ、政治的・社会的状況の中で相対的なものとして複眼的に捉えられる。問題は、相談者が自らの中に抱えている（つまり相談者＝問題）ととらえるのではなく、相談者の生きる社会的なコンテクストの中で相対的にとらえることにより、「問題が問題なのであって、人が問題なのではない」と考える。このような視点を持つことにより、相談者は問題と距離を置いて考えることができるようになり（「問題の外在化」と呼ばれる）、セラピストとの協働作業を通して、問題にまみれたストーリーは相談者にとって好ましい物語へと語り直しがなされていくのである（White & Epston 1990, Madigan 2019）。

このような語り直しのプロセスで重要になるのは、セラピーの場で語られることばと社会的なパワーとの関係である（Madigan, 2019）。Foucault (1989, 1994 等）に影響を受け、社会的知識と権力の不公平なあり方が「科学的」「学術的」「当然」といったレッテルをもって社会のあらゆる分野にはびこることに敏感になり、それに対抗しようとする。それゆえナラティブ・セラピーでは誰が（どういう立場の人がどのような権力を持って）問題についてどのようなことばで語るのか、その背後にあるパワーの影響はどのようなものかを探る（Madigan 2019）。

本稿でとりあげるナラティブ・セラピーのセッションも、このような政治的な意識を持ったセラピストによるものである点に注意が必要である。セラピスト自身が自分の持つ権力と知識を意識し、セラピーにおける固定的な役割に固執することのないように常に吟味することが求められる（White & Epston 1990, Nylund 2006, Madigan 2019）。

しかし、そのようなセラピストとのセラピー・セッションであっても、裁判所の命によるセラピーであり、異なる人種・社会階級に属する者同士のセラピーである。それゆえに、セラピーの場においてパワーの違いは避けられない。そしてそれはことばにも反映される。

2.2. アメリカ社会における人種とカウンセリング

Khan (2020) が *The Guardian* に執筆した記事によれば、アメリカのカウンセリングにおいては、黒人やアジア人などの有色人種は、社会的にさまざまなメンタルヘルス上のリスク要因を抱えているという。その要因とは常に人種的差別にさらされていることに加え、貧困、失業、学業上の結果が低いことなどである。

There is a growing body of research to suggest that regular exposure to racism increases the chances of developing psychosis and depression, while other mental health risk factors such as poverty, higher unemployment and lower educational outcomes tend to have an impact on BME Brits. (*The Guardian*, Feb. 10, 2020)

こういった厳しい状況の中で、白人よりも薬を多く投与されたり、会話によるカウンセリングに対する満足度が白人より低く、自分たちの文化的なバックグラウンドを考慮してもらえたと感じていないという。

Akinyela (2014) はアフリカ系アメリカ人のファミリーセラピストであり本稿でとりあげるセラピストのMadiganの影響を受けた一人であるが、彼女は異なる文化を単にヨーロッパ文化に包含するにとどまるような多文化主義ではなく、真に互いを尊重する *cultural democracy* の視点によるセラピーの必要性を指摘する (Akinyela 2014, p. 45)。

Cultural democracy moves practice beyond notions of multi-culturalism or the simple inclusion of non-European cultures and ideas into a Euro-cultural dominated field of practice. Cultural democracy provides room for equally respected voices and cultural experiences to influence narrative and family therapy practice.

人種的マイノリティーに対する尊敬の態度は、オーストラリア、ニュージーランドといった先住民と白人の住む社会におけるナラティブ・セラピーの発展の歴史において、ナラティブ・セラピーが生まれた当初から大切にされてきた点であるという（Epston, p.c.）。

本研究におけるセラピストのMadiganもまた自著（Madigan 2019）の中で、多くのセラピーでは、肌の色が異なるクライアントをしばしば“正常”から逸脱したグループとみなすことにより、人種差別のディスコースが再生産されがちであるというEspinの指摘（Nylund 2006）を紹介している。さらにEspin(1995)はこれに対抗する視点が社会構成主義的なパラダイムであると指摘しているという（Madigan 2019）。

2.3. 社会言語学的なナラティブ・セラピーの分析―饒平名の研究の振り返りと本研究の位置づけ

社会言語学の領域におけるナラティブ・セラピーの談話分析研究は、まだ数が少ないが、饒平名が扱ってきたMadiganのデータにおける一連の研究をここで少し振り返っておくことで、社会言語学的な視点がどのように人種問題やセラピーのディスコース理解に貢献が可能かを考えておきたい。饒平名（2014）では、セラピストが持つ社会構成主義的なものの見方やセラピーに対するセラピスト自身の考え方がいかにセラピーの方向性の取り方に影響したかを示した。饒平名（2015）では、セッションで語られた複数のストーリー（事件を起こした少年が語る物語、少年の母親が語る物語、セラピストとの協働作業により生まれた物語）の間テキスト性に注目し、「問題のストーリー」が誰によって語られ、どのようにしてクライアントにとって好ましい物語に書き換えられていったか、を見てきた。それにより、社会の権威ある立場にある人々によって語られ押し付けられた物語と、生身のクライアントの言葉で語られる物語のギャップを通して立ち現れる社会的ディスコースへの批判を行った。

2018年には、*why, how come*ではじまるセラピストの質問と、それに対するクライアントの少年の答えに着目し、*why-question*に論理的に答える難しさとともに、その答えに反映されたアフリカ系アメリカ人を取り巻く社会の生きづらさを指摘した（饒平名2018）。

また、饒平名（2020）では、クライアントが起訴された事件に直接かかわるストーリーと、その周辺で起きた小さなエピソードの数々を比較し、そこにみられる共通点から浮かびあがる、社会的コンテキストに深く内在した不均衡な人種的扱いの構造を指摘している。

これらを踏まえて、今回は、①このセッションに存在した社会的不均衡の要因を具体的に3つあげ、さらに②そのような状況下での人種差別に関する語り方として*race*, *you*の使用、間接的・ためらいがちな言い方、非標準変種の英語に注目し、力の差がいかに差別に関する語りに反映されていたかを検討する。

セラピー・セッションにおける対話のスク립トをセラピストが作成してセッションを振り返り、質問の立て方や対応の仕方を吟味することはこれまでも行われてきた。しかし、言いよどみ、語法などの詳細にまで突っ込んで社会言語学的に談話の分析することはあまりないのではないだろうか。言語学的な視点も織りこんだ分析では、このような細やかな語り方の差にも焦点を当てることで、セッションで何が起きていたのかを知る手がかりをさらに得ることが出来るのではないかと考える。

3. データ

分析の対象とするのは、実際のナラティブ・セラピーを教育目的で録画し販売されているDVD “*Narrative Family Therapy with Stephen Madigan, Ph.D*”ⁱⁱである。これは熟練セラピストによる実際のカウンセリングを録画してセラピストの育成のために解説を加えて編集したシリーズの一つである。約46分間のセラピー・セッションの前後では、セラピストのStephen Madiganが解説や振り返りを他のセラピストたちに語っている。本研究では、Institutional/instructor’s version（教育目的で多人数で視聴可能）に付属しているマニュアル（Miller & Madigan 2011）に書かれたスク립トとセラピストの内省、Madigan(2019)で述べられた解説も参照しながら分析をすすめる。なおスク립トは実際の映像に基づき、

ii DVD のスク립トを修正したものを研究目的で使用するを psychotherapy.net より許可していただいた。深く感謝の意を表したい。

筆者が適宜あいづちや間、重複発言なども書き記して本研究では使用する。

セラピーは、セラピストのStephen Madigan、クライアントのJesse(アフリカ系アメリカ人、偽名)、その母親（アフリカ系アメリカ人）の3人によって行われる。Madiganはカナダ在住の中年の白人男性である。Jesseは米国シカゴ在住の少年（11もしくは12歳）、学校で白人のクラスメートに対する暴行をしたということで裁判所送りとなり、停学、罰金、保護観察処分、コミュニティにおけるボランティア活動の他、怒り管理のセラピーを受けるように言われた。母親もアフリカ系アメリカ人である。画面一番左にMadigan、中央にJesse、右端に母親が座っている。セラピストと母親はやや中央を向いて座っており、お互いに視線を合わせることが出来る。

図1：セラピストとクライアントの位置



4. 3つのレベルにおける力関係

セラピーにおいては、セラピスト側がクライアントに対して社会的なパワーを持つことはこれまでも指摘されてきたが（例えばMonk, Winslade, Crocket, Epston 1997）、白人セラピストと黒人クライアントが黒人に対する人種差別をテーマに相談をしている本データにおいては、力関係の差はさらに複雑な様相を見せている。少なくとも3つのレベルにおける力関係の差が本データには関係していたと考えられる。これは、人種の異なるセラピストとクライアント間で行われるセラピーにおいてある程度共通して配慮が必要な点であり、この節ではそれらを取りあげ吟味していきたい。

4.1. クライアントの住むコミュニティにおける人種差別

第1番目は、クライアントが住むコミュニティである。アフリカ系アメリカ人に対する否定的なレッテルがあった可能性である。少なくとも母親がそのことを感じている点が重要であろう。

母親は白人が主流派の学校に息子が通うようになってから経験したさまざまな小さなエピソードを紹介している（例えば事務所では黒人の母親が存在していないかのように冷たい扱いを受ける事例、白人の女子生徒とJesseが出合い頭にぶつかったとき、白人の親から一方的に怒鳴られた事例等）。白人の母親と黒人の母親では学校での扱いが異なっていることを述べている。ここにコミュニティ内での黒人に対する不平等な扱いのストーリーが根付いているといえる（饒平名 2020）。

また、饒平名（2015）でも指摘しているが、Jesseのことをよく知らない裁判官が、あたかも彼のことをよく知っているかのようにJesseがいかに悪い少年か裁判では語ったと母親は言う。このようにアフリカ系アメリカ人に対する否定的な扱いのストーリーがセラピーの場で繰り返し語られた。

4.2. セラピストとクライアントという立場の違い

第2のレベルとして検討すべきは、人種に関係なくセラピストとクライアントの関係に存在する立場の違いと力関係である。それは次のような点に典型的に表れる。

1. 質問をするのは主にセラピストである。
2. セッションの方向性を決めるのはセラピストである（いつどのように始め、何を聞き、いつ終わるか。また、次に誰がしゃべるかを指定する等）。
3. 治療的会話を実施する知識とスキルをセラピストは持つと想定されている。特に裁判所から指示されたアンガーマネジメント・セラピー（本研究でとりあげるケースはこれにあたる）は、それを受けることが裁判所の裁定の履行として必要となる。

今回のセラピー・セッションにおいても、母親とJesseに質問をするのはセラピストであり、母親からの質問は、セラピストの質問の内容に対する確認の時、および息子のJesseに対して「なぜこのような扱いを学校で受けたのか理由を知っているか？」を聞いたときだけである。Jesseは、セラピストにも母親にも質問をすることはなかった。

こうして質問を投げかけ、その答えのどの部分を取り上げて発展させるか、どのような方向からセッションを進めていくのかを決めるのはセラピストである。

最後に、上記リストの第3の点（セラピストの持つ治療的会話を実施する知識とスキル）は、Jesseが罰金や奉仕活動などに加えてアンガーマネジメント・セラピーを受けることが裁判所から命じられている点に深くかかわる。母親は「怒り」に関してセラピーをJesseが受ける必要はないと考えていた。なぜならJesseは「怒り」という感情のコントロールができない子どもではなく、また「怒り」が今回の問題の原因だとは考えていないからである。しかし現実的には、必要がなくても裁判所の指示には従わなくてはならない、と述べている。（スクリプト中、 は途中からセラピストの声がかぶさったことを示す。顔の表情、笑い等は（ ）内に示した。太字は声の大きかった発言を示す。）

Therapist : What, uh, what word would you use?

Mother : … (考える様子) Okay, my opinion, I don't think he need any counseling (笑い),

but once something goes to court, then you have to .. follow

whatever steps they say to take. He...

Therapist: Sure. Right. So what do you think they got wrong?

少し後で、学校で起きたことの詳細（Jesseが学校で他の男の子をベルトでぶち、ベルトの使用が裁判所で暴行とされたこと）を語るが、そこでも裁判所の裁定なのでカウンセリングを受けなくてはならないと述べる。

Therapist : Battery? Does that mean assault? Is that um,

Mother : Yes, the belt they said is assault. Yes.

Therapist : | the belt, |.. I see. I see.

Mother : So then he had to seek counseling? Uh .. and **see** what they say (早口で).

Therapist : | Yeah, that's why,

Therapist : I see and that's why you've come here to talk to me.

Mother : | Yes. | Yes.

このように、「カウンセリングを受けて彼ら（カウンセラー）が何というかを知らないといけない」（So then he had to seek counseling? Uh... and **see** what they say.）と母親は語った。この時点でカウンセラーは、怒りに関するカウンセリングを提供する司法システムに組み込まれており、クライアントが従うべき権威ある側に属する存在としてクライアント側からはとらえられている。ただしMadigan自身は、Jesseについて、「アンガーマネージメント・セラピーが必要な少年とは自分も思っていないし、やり方も知らないの、母親がアンガーマネージメントは必要ないと考えている点は自分にも好都合だった」とDVD付属マニスクリプトの中でコメントしている。このコメントからは、セラピスト自身は司法システムから一歩離れてセラピーの場にいることがうかがえる。この姿勢は、彼が、“So what do you think they got wrong?”と聞いて、裁判所側が判断を間違った可能性にたつて母親の解釈を聞き出そうとしているところからもわかるであろう。

セラピストはセッション後に学校長に手紙を送ったことがMadiganの著書に記されている（Madigan 2019）。その内容は、Jesseと面談の結果Jesseには何の問題も見いだせないこと、学校でJesseのプロファイルに否定的な記録が残ることを懸念していること、そしてできるなら校長先生と直接話したいという希望であった。さらに、のちにクライアントの母親からセラピストに送られた手紙では、セラピストが費用を払ったことへのお礼が書かれている。

このようなセラピストの果たした社会的な役割は、クライアントの未来に否定的な問題の影響が残ることを懸念してのことである。その一方で、そのような助けの手を差し伸べることができる立場、つまり社会的に影響力を持つ立場にセラピストはいた、ということでもある。だからこそ、Madiganはナラティブ・セラピーはある意味で非常に社会的、政治的な要素を持つと指摘している

(Madigan 2019)。

社会的な立場に結びつけられた力の差に敏感であることは、ナラティブ・セラピーでは早くから注目され、セラピストの課題として常に自分の立場が持つ社会的パワーを自覚し、吟味することが求められている (Monk, Winslade, Crocket & Epston 1997, Nyuland 2006, Madigan 2019)。

4.3. セラピストとクライアントの社会的属性

最後にクライアントが置かれたpowerlessな状況にかかわった要因として、クライアントとセラピストの社会的属性の違いを検討する。セラピストは教育を受けた白人のカナダ人男性である。それに対してクライアントは人種的にはアフリカ系アメリカ人であり、年齢はJesseはMadiganよりもかなり年下の少年である。また、ジェンダーに関して言えば、母親は女性、Madiganは男性である。経済的な背景まではDVDデータから明らかではないが、上記で述べたようにセラピストが裁判所への費用を支払ったりⁱⁱⁱ、この親子の非標準英語発音を考えると、経済的社会的階級にも差があったことが推察される。

こうして、3つのレベル、つまりコミュニティにおける人種差別、セラピストとクライアントという役割の違い、人種や性別、年齢、社会的階級といった属性において、クライアントは社会的に力が弱い側に立っていたと言えるであろう。

では、次にこのような複数のレベルでの力関係がかかわる中で、そのような差が実際の言語使用面でどのように表れていたかを見ていこう。

5. 社会言語学的考察

5.1. *Race*という単語の使用

カウンセラーとクライアントの言葉遣いの違いの中で、まず特徴的だったのが*race*という単語を使うかどうかであった。カウンセラーの方は使うが、クライアントの少年と母親は使わない点については饒平名（2020）で簡単に触れて

iii ただしこれは録画への協力へのお礼などほかの要因があった可能性もある。

いるが、ここでは実際の会話スクリプトを提示しながら詳細部分について検討する。以下のやりとりはセラピストが実際にraceを使った部分である。注目すべき表現には下線を付す。

Therapist : So do you think that uh race.. had something to do with how Jesse was treated?

Mother : I think so, because it hadn't been um a white boy, it was a white boy, if it had been two white boys, I don't think, it would, they wouldn't have went to court.

セラピストは、Madigan (2019, pp. 65-66) の中で、この部分について “Being the person with power and privilege in the session, it was up to me to broach the issue of race with the hope that Jesse’s mother felt safe enough to discuss it with me” と言及している。つまり、白人として、セラピストとして、権力や特権を持っている側から人種の問題を切り出すことが自分にゆだねられていると考えていた。セラピスト自身が自分の持つ権力や地位的な特権を認識し、意図的にraceという単語を使用したことがうかがえる。

実はこの場面の少し前に、セラピストは人種差別が問題の原因ではないか、取り上げることが可能だった場面があった。しかし、その時は母親に人種差別について語ってもらうことのほうが「安全」と考え、母親に話題をふっている。だが、母親はセラピストからの質問を息子のJesseにふって、Jesseがどう考えるかを聞くこととなった。そしてJesseはなぜ不公平な扱いを受けるのか理由は「知らない」を繰り返すにとどまった。

Therapist : Is that what happened? Yeah. Do you have any idea as to why it is that you might have been treated in this way?

[Madigan Commentary : At this point, as a white therapist with all the power, I should have introduced the issue of race and racism. But instead I chose to lead the mother into it, believing it was “safer” to conduct the session in this way. In retrospect, although it worked out right, I was wrong.]

Mother : Do you know, Jesse? (Jesseの方を向いて)

Jesse : No.

このように、一度は母親側が人種差別についてリードして語ることをセラピストは期待したようだが、それはうまくいかなかった。結果として、セラピストが*race*という単語を直接とりあげることとなったのである。Jesseも母親と同様に*race*ということばを使わない。ただ、白人は白人同士、黒人は黒人同士の方がうまくいく、「そういうものだ」という言い方をするのみであった（饒平名 2020）。

クライアントが*race*を自分からは積極的に用いないことは、次の第2のポイントである人種についての「ためらいがちな言い方」ともつながる。

5.2. ためらいがちな物言い

*Race*をクライアント親子は使わなかっただけでなく、母親は人種差別について語るときにためらいがちなトーンであった。饒平名（2020）では肌の色による異なる扱い方が校内にあることを明言せず、“seems like it to me”「自分にはそのようにみえる」という言い方をした例を挙げているが、こういった例はその他にも多数あげることができる。

例1：人種差別的な扱いを受けることについて

Mother : well …, I don't like it

ここでは“well”と言ってまず少し言いよどんだのち、短い間を置き、“I don't like it”（好きではない）と言っている。これは“I hate it!”といった言い方と比較すれば、控えめで間接的な印象を与えるのではないだろうか。

例2：裁判所に行く経験について

Therapist : What was the experience like going to court?

Mother : Hm it wasn't a good one.

Therapist : It wasn't a good one?

Mother : And for a whole year we will have to go up and down… the road going

back to court, probation officer and …

Therapist : Is that what happened, did you get a probation officer?

「裁判所に行くのはどのような経験だったか」と聞かれ、母親は「いいものではなかった (“It wasn't a good one”) と答えている。「ひどい経験だった」とか「裁判では不当な扱いだった」などという表現も可能だったと思われる場面だが、「良くはなかった」と遠回しな言い方をしている。

さらに、これに続いて語られた、処罰については、“A whole year, go up and down the road, going back to court …”, と言っているが、“up and down the road”, “going back ” はいかにも「あちこち、行ったり来たり」という様子が伝わってくる。そしてそのあとに続く、行かなくてはならない場所のリストと合わせて、丸1年の間、裁判所や保護観察官のところへ、あっちへ行ったりこっちへ行ったりしなくてはならない負担の大きさを伝えている。このあとも、Jesseが受けた罰のリストはさらに続いた。それは40時間のコミュニティーワーク（奉仕活動）、300ドル以上の罰金であった。Therapistはそれを聞いて裁判所の判断が“outrageous”（常軌を逸している）と心中で思ったことがDVD付属マニュアルの中で解説されている。

こうしてあからさまな批判的表現を使わずに間接的に、不当とも思えるような重い罰を受けたことをクライアントは伝えている。

同様のためらいがちな言い方は次の発言にもみられる。Jesseは学区変更で白人が主流を占める新しい学校へ転校させられ、その新しい学校で事件は起きた。この学校について母親が語る場面である。

Mother : This school district out here, Um it just seem like, at least a little anything, things that could be straightened out, they, the district makes a big thing out of.

子ども同士が（ふざけて）ぶちあっただけならば、裁判所に送らなくても、学校内で解決の道をまず探すべきなのに、問題を過大に扱った学校への不信感を表明している場面である。しかし、*just, seem, at least, a little anything* とい

た単語を多用して、はっきりと言いきらないように気を使っていることがうかがえる。

言いきることを避ける言葉遣いは、このセッションが録画されていることにも関係があるかもしれない。セラピストの養成目的とはいえ、どのような立場の人が見るかわからない以上、そしてセラピストが白人男性であることにも配慮して、あからさまに白人による差別的扱いに対して厳しい批判を母親の側からは言いにくい可能性が十分に考えられる。

5.3. *You* の使用

差別の経験を語るとき、母親の発言において*you*が使われる場面がしばしばみられた。これは、セラピストに母親が黒人の視点を教えているかのように使われていた。例えば、次の発話は、人種のマイノリティとして学校に行くという経験はどのようなものかをセラピストに伝えようとしている場面である。

Mother : It's like you have a black principal in the high school, black principal ...

アフリカ系アメリカ人の視点を「それは、あなたが黒人の校長先生がいる高校にいるようなものです、黒人の校長先生………」と表現することで、具体的にアフリカ系アメリカ人の視点から状況を感じることができるよう、母親が白人セラピストを導いているかのようなのである。

もう一つ例を見ておこう。次の会話は、Jesseが不公平な扱いを受けることについて母親としてどう感じるかをセラピストがきいた場面である。

Therapist : Having Jesse go through this experience, as a mother, how does it make you feel?

Mother : Make you feel like you are about 3 feet tall. And it make you feel like uh if you get your money together you move out. (笑う)

ここで母親は「それはまるであなたが3フィート [の背丈] に縮まったように感じますよ。あなたのお金をかき集めて引っ越したいと、あなたに思わせま

すよ」と述べている。しかし実際に3 feet tall、つまり小さく身が縮む思いをしたのは、母親である。“It makes me feel like I am about 3 feet tall”とも言えなくはない場面である。しかし第一人称を使う代わりに第二人称のyouを使うことで、「アフリカ系アメリカ人の私」の経験が、より一般的な人間として、聞き手をも包括する普遍的な経験に広がる。

さらにこのあとすぐに続く次の場面でも、アフリカ系アメリカ人の視点を「あなた」の視点にして語っている。

Mother : Well, see that type of thing is done so for, like if I treat you like this, you get out of there. That is what it is for. And see a lot of people when they can, they just move out, just move out away so they don't have to be bothered with that.

もしも「私」が「あなた」をこのように扱ったら、「あなた」はそこ（住んでいるコミュニティ）を出ていくでしょう、と表現することで、同じ人間としてアフリカ系アメリカ人が感じる不安や不公平感をセラピストとクライアントが共有しようとしているような言い方である。

このような視点は、冒頭で述べたBlack lives matterの運動で繰り返し叫ばれた声とも繋がっていくのではないだろうか。たとえば白人警官に後部から撃たれ重傷を負ったJacob Blake氏の家族が開いた会見（2020年8月25日）で、群衆の前に彼の姉妹Letetra Widman氏が語った言葉は、人々の注目を集めた。

And when you say the name Jacob Blake, make sure you say father, make sure you say cousin, make sure you say son, make sure you say uncle. But most importantly human. （Newsweek 2020, 8月26日）

肌の色が違って、人間としての価値、尊厳は白人と同等であることをわかってほしいという訴えである。本研究で分析しているセラピーは1990年代に録画されたと思われる。しかし、アフリカ系アメリカ人の訴えには現代も変わらずに共通するものがあるのではないだろうか。自分たちも、あなた方と同様に人間であり、そのことをまず認めてほしい、と。

5.4. African American Englishの特徴が表れた発話

もう一つ特徴的なのが、クライアントによるAfrican American Englishによくみられる特徴のある英語使用と、セラピストの標準英語の使用の違いである。具体的には、クライアントの英語には多重否定、3人称単数現在の *s* の脱落、発音面では非標準英語発音が使われた発言がみられた。文法的な特徴は母親の発言に特によく見られた^{iv}。以下にその例を示す。

多重否定

Mother : I never had anyone to bother me. I mean, no matter what color they were, I have never had no one to bother me.

3人称単数現在の *s* の脱落

Mother : If he go to school or wherever he go, just mind his own business. If someone does something to him, … just tell the teacher or an adult and not fight back if he doesn't, if he don't have to.

Mother : The boy went out the bathroom he say, when he come back in, he say that he hit him, he take his belt off and hit him with the belt. That do sound, don't it doesn't sound right hit someone with a belt.

上記の例で、“if he doesn't, if he don't have to” と言い直し、三単現の *s* が落ちている。その次の例では、最初に三単現の *s* がついていなかったが言い直して “That do sound, don't it doesn't sound” と言っている。このようなケースを見ると、クライアント側は標準英語の語法に近づけて話そうとしていたのではないかとされる。実際、多重否定や三単現の *s* の脱落が起きていない発話も会話には多数みられ、標準英語の語法とAfrican American Englishの語法の両方が混在していた。また発音に関しては、セラピストが標準的な北米発音に近いものであ

iv Jesse の発言は全体的に短いものが多く、三単現の *s* の脱落や多重否定の出現が少ない。これはセッションにおける母親と Jesse の発言量の違いも影響しているかもしれない。

るのに対して、クライアントはAfrican American Englishの特徴が表れた発音がみられた。

異なる英語変種の使用は、お互いが異なる文化的社会的グループに属することを相手に合図する。Labov(1972)は、会話のコンテキストのformalityの違い(フォーマルなインタビューやワードリストを読み上げる場面からカジュアルな会話場面等)によって同じ話し手が社会で権威あると認められた発音から非標準発音まで使い分けることを示した。さらにLabov(1990)は、女性の方が男性よりも、より権威的に認められた発音に近づける傾向があることを示している。アフリカ系アメリカ人のクライアントは、裁判所の命令によるセラピーであること、録画されていることも考慮すれば、かなり会話の場をフォーマルな場面ととらえて標準英語に近づける努力をしようとしたことが推測される^v。ここでも使用する言語のvariationを修正して話すのは、立場や社会的力の弱い側であろう。

治療的会話のやりとりにおけるこのような社会言語学的な視点は、クライアントが置かれた状況について、さらに深い理解をもたらしきっかけとなるのではないだろうか。

6. 結論

本稿では、白人のセラピストと黒人のクライアントのナラティブ・セラピー・セッションをとりあげ、両者は3つのレベルにおいて不均衡な立場におかれていることを確認した。そのような認識に基づき、実際の言語使用を見た結果、参加者の言葉遣いに社会的な立場や属性の違いのみならず、人種に関わるダイアログがこのようなパワーの違いを映し出していること、その一方でそのようなパワーの違いに敏感になることで、クライアントが最後に「本当のストーリーを話すことが出来た」と感想を洩らすセッションが行われたことを示した。

セラピスト自身は、セッションにおけるいくつかの質問は、その投げかけ方

v 服装も母親はフォーマルなスーツ姿であり、母親がこの会話の場をフォーマルな場所としてとらえていたことを裏付けるのではないか。

やタイミングについて、さらにより方法があったかもしれないとセッション後の解説（DVDの後半に収録）で述べている。今回のセッションのあとは、可能ならアフリカ系アメリカ人のカウンセラーが引き継ぐことも提案されている。セラピスト自身も含めて、常に語り直しへと招かれているとも言えよう。

今後に向けての示唆として、対等な立場で話し合える場を設けることが望ましいのは言うまでもない。が、語りの場にそれぞれの社会的なパワーの差が存在することは避けられないのであれば、そのことを十分に認識することが、相手を尊重する対話を可能にする第1歩であろう。その際に、言いよどみ、間接的な言い方、異なる言語変種の使用に対しても耳を傾け、敏感になることで、ことばの奥に見え隠れする社会的な立場やパワーの違いとクライアントの思いがより鮮明に聞こえてくる可能性がある。ただし、本研究ではアフリカ系アメリカ人の発音の変化については音韻論的に突っ込んだ分析まではできなかった。その点については今後の課題となるだろう。

データDVD

Narrative Family Therapy with Stephan Madigan. (2011). Mills Valle, CA: Psycotera-
py.net. (VHS版オリジナル: Carlson, John and Diane Kjos (1999) *Narrative Family
Therapy with Stephan Madigan* [Family Therapy with the Expert Series Videotape]
Boston, MA: Allyn and Bacon.)

参考文献

- Akinyela, Makung M. (2014). Narrative Therapy and Cultural Democracy: A Testimony View. *Australia & New Zealand Journal of Family therapy. Volume35, Issue1 Special Issue: Narrative Family Therapy* April 2014 pp. 46-49.
- Dickson, Victoria & Lauren Hall-Lew. (2017). Class, gender, and rhoticity: The social stratification of non-prevocalic /r/ in Edinburgh speech. *Journal of English Linguistics* 45 (3). 229–259.
- Espin, Oliva. M. (1995). On knowing you are unknown: Women of color constructing psychology. In Adleman, J. and Enguidanos, G. (eds.), *Racism in the lives of women: testimony, theory, and guides to antiracist practice*. New York, NY: Haworth Press. 127-136.
- Foucault, Michel. (1989). In Lotringer, S. ed., *Foucault Live: Collected interviews, 1961-1984*. New York, NY: Semiotext(e).
- Foucault, Michel. (1994). On the genealogy of ethics: An overview of work in progress. In Rab-

- inow, P. ed., *Ethics: Subjectivity and Truth: vol. 1. Essential Works of Foucault 1954-1984*. London, England: Penguin Press. pp. 253-280.
- Labov, William. (1972). *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Labov, William. (1990). The intersection of sex and social class in the course of linguistic change. *Language Variation and Change*, 2 (1990), 205-254. Cambridge University.
- Madigan, Stephen. (2019). *Narrative Therapy [second edition.] Theories of Psychotherapy Series*. Washington, D.C.: American Psychological Association.
- Khan, Coco. (2020). 'I thought I was the lost cause': How therapy is failing people of color. *The Guardian*. Health & Wellbeing. 2020年2月10日
- Monk, Gerald., John Winslade, Kathie Crocket, and David Epston. (eds.) (1997). *The Jossey-Bass psychology series. Narrative therapy in practice: The archaeology of hope*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Nylund, David (2006). Critical Multiculturalism, whiteness and social work: Toward a more radical view of cultural competence. *Journal of Progressive Human Services*, 17. pp. 27-42.
- 饒平名尚子 (2014).あるナラティブ・セラピーにおけるセラピストの立場と語りへの影響－インターアクションの社会言語学的観点から『フェリス女学院大学文学部紀要』第49号pp.61-85.
- 饒平名尚子 (2015).ナラティブ・セラピーにおける間テキスト性とスモール・ストーリー－アイデンティティ形成への影響『ことばと人間』第10号pp. 39-56.
- Yohena, Shoko O. (2017). Power, Race and Communicative Styles in Cross-ethnic Narrative Therapy. A Poster Presentation at 19th International Pragmatics Conference (Belfast.)
- 饒平名尚子 (2018).「あるナラティブ・セラピーにおけるwhy questionが映し出す世界」フェリス女学院大学文学部紀要 第54号pp. 133-152.
- 饒平名尚子 (2020).「あるナラティブ・セラピーにおける人種・アイデンティティ・ことば」 秦かおり・村田和代編『ナラティブ研究の可能性 語りが写し出す社会』ひつじ書房 pp.171-192.
- White, Michael and David Epston (1990). *Narrative means to therapeutic ends*. New York: Norton.
- Widman, Letetra. (2020). Jacob Blake's Sister Isn't Sad About Brother's Shooting: 'I Don't Want Your Pity. I Want Change.' *News Week* Feb. 10th, 2020. <https://www.newsweek.com/jacob-blake-sister-calls-change-1527797> (2021年1月4日アクセス)